

実直

何分経ただろうか。静かに時が流れる。彼は自分の解いた計算6問をじっと見つめている。後のない入塾テスト追試。6問中1問でも落とせば不合格決定である。制限時間はない。納得のいくまで見直ししてよい。ただ、今までこれほどまでに時間をかけた子はただの一人もいなかった。3分そこそこで計算はやり終えてからの見直し。普通、いつまでもただの計算に向き合っただけなどいたくないものである。たとえ入塾できるかできないかの瀬戸際であっても、中1に上がる前の小学生ならばそんなものだろう。だが、彼は違った。

「できました。」遂に彼が鉛筆を置いて答案を差し出した。私は受け取り、別室で採点した後、廊下で待たれているお母さんと呼びに行く。お母さんは窓際に立たれてじっと外をご覧になっていた。「お待たせしました。」と言うと、お母さんは「思っていたより早かったです。1時間かけるとおっしゃってました。」とおっしゃった。結果は全問正解。入塾テスト前、本人自ら毎日10問ずつ計算練習をしたという。しかし、毎回1問間違えていたらしい。それでも毎日真剣に取り組んだのだ。追試にはなったものの、最後の最後にしっかりつかんだ合格。これが、ここから始まる彼の中学校生活・・・着実に一步一步踏み進めていく第一歩だったのだと思う。

A君は「実直」を絵に描いたような男の子だった。礼儀正しく真面目で何事に対しても誠実に取り組む。学校の中でも同級生や先生から絶大な信頼を得ていた。塾の中でも同様である。学校からの連絡プリントや定期テスト問題など、誰が持ってきてくれてもいいのだが、持ってきてくれるのはいつも彼だった。みんな彼に甘えているのである。自分ばかりに任せられて腹が立つこともあったが、それでもA君は塾のために持ってきてくれた。要領よくパッパとこなせるタイプではない。でも彼に任せておけば間違いなく仕事はやり遂げてくれる。堅実に一つ一つ積み上げていくこの性格は、勉強面を伸ばすことにも大いに貢献した。学年順位も通知表も30台でのスタートだったが、一桁順位もオール5も取った。時間制限のある高校受験本番でも英語は満点を取ってくるなど今度はきっちり一発で決め、見事第一志望合格を掴んだのだ。

A君は今、社会科の教師になることを夢見て旭野高校に元気に通っている。ここからも今まで通り、苦しいことがあろうとも一段一段階段を上がっていくことだろう。彼の実直な人柄は、周りを助け、そして彼自身を助けることになるに違いない。卒塾パーティーの前日、私に渡す色紙を持って、全員の家を回りメッセージを集めてくれたと他の子から聞いた。そんなあたたかさも彼そのものなのだ。「これは僕からです。」—彼からのお花は今も教室で笑っている。